

新たな遺跡を発見!! (前田遺跡)

始良市教育委員会文化財係 岩元康成

前田遺跡は始良市住吉にある遺跡で、令和元年11月から令和2年9月まで発掘調査を行いました。この遺跡の時代は、縄文時代(約4,500年前~3,000年前)、古墳時代、奈良・平安時代になります。

その中でも縄文時代の中期(約4,500年前)のドングリを貯蔵した穴(貯蔵穴)が70基ほど見つかり、これほど多くの貯蔵穴が発見されたのは鹿児島県で初めての事例となりました。貯蔵穴は周りから水が湧いてくる場所に掘られており、常に水が溜まっていた。



遺跡調査の様子

ここにドングリを入れることで、ドングリを食べる虫からの害を防いでいたと考えられます。

貯蔵穴からはドングリが大量に出土しています。通常水気のない遺跡ではドングリは土に分解され残りませんが、前田遺跡では常に湧水があったため、そのままの状態^{ゆうすい}で保存されていました。出土したばかりのドングリは、茶色ですが空気に触れてしまうとすぐに黒く変色します。

また、ドングリの他にクルミなどの植物の種子や葉、ヒョウタン、サクラの樹皮、動物の骨・歯、昆虫の羽など通常の遺跡では出土しないものが出土しています。そしてドングリを水につける時に入れた容器の編み籠も出土しています。編み籠は水につけている時は、木杭で固定していたか、石で押さえていたと考えられます。この編み籠も鹿児島県では初めての出土例となりました。



ドングリが密集した貯蔵穴



編み籠

蒲生中学校3年生の郷土学習支援

恒吉一洋

去る5月2日(火)、私たち始良歴史ボランティア協会は、昨年に引き続き蒲生中学校3年生の郷土学習で蒲生麓地区周辺の史跡を案内しました。

令和元年度5月、蒲生麓に関連した9つの文化財が「日本遺産」に認定されました。蒲生中学校の取り組みは、地元にある貴重な文化財をこれからも守っていこう、そのためにももっと詳しく学習しようという意欲を持った郷土学習です。

今回は、武家門(西馬場)・御仮屋門・犬模・蒲生のクス・蒲生八幡神社・記念碑群・招魂社・永興寺跡などを見て回りました。

推定樹齢1500年で日本一の巨樹である蒲生のクス、文政9年(1826)建造の堂々とした御仮屋門、保安4年(1123)創建の歴史ある蒲生八幡神社、『街道をゆく・肥薩のみち』の中で作家・司馬遼太郎も驚いたという明治40年(1907)建立の記念碑群など、その古い歴史とすばらしさを再認識したことと思います。

保安4年から弘治3年(1557)までの蒲生氏による約430年間の統治、その後明治維新までの313年間の島津氏による統治、そして今日まで、その長い歴史の中で生まれ、育まれてきた貴重な文化財が、大規模な自然災害や戦火にも関わらず残されてきた幸運を大切に、その保存と継承に地元の中学生在が力強く貢献してくれることが期待される楽しい機会となりました。



蒲生麓を歩く生徒たち

始良市の武家屋敷群(4麓)

令和元年に日本遺産に認定された、「薩摩の武士が生きた町～武家屋敷群「麓」を歩く～」の構成資産として、始良市から武家門通りなどがある蒲生麓が選ばれました。

その他、始良市には加治木・帖佐・重富・山田にそれぞれの歴史に育まれた麓集落があります。今回は、これらの麓を歩いてみました。

加治木麓



戦前の仮屋馬場通り

宮内伸一
加治木麓は、17世紀初め、島津義弘の町割りによりできたと考えられます。

『薩藩御城下絵図(加治木)』を見ると加治木屋形を中心にして、西側(柳田から萩原にかけて)と南東側(仮屋町から吉原にかけて)に家臣団の侍屋敷が続いており、その南側に町家を配した、小さいながらも城下町の風情が漂う造りとなっています。しかしながら、現在、当時を偲ばせる雰囲気は残っておらず、わずかに屋形跡の石垣が残っているだけです。これは、加治木が、明治時代以降この地域を町の中心として発展してきた証でもあると思います。

今の町並みから当時の様子は窺えませんが、仮屋馬場に立ち、屋形を中心とした加治木の歴史をひも解いていくと、不思議に当時の面影が浮かんでくるような気がします。それだけ加治木は由緒ある麓だったのでしょ。

帖佐麓

橋木雅晴

帖佐麓とは、帖佐小学校(地頭仮屋跡)を中心とする鍋倉・仮屋・宇都・岩崎・高樋・三拾町・上麓などに居住していた郷士の屋敷群をいいます。



太閤検地後の
文禄4年(1595)

12月島津義弘は
栗野から帖佐へ
移りました。

この時、帖佐

麓の原形が形成されたと考えられ、江戸時代に帖佐郷の政治・経済の中心地として栄えました。

義弘は敵軍の武将であっても降伏した優秀な人材は味方とし、また中国人や朝鮮人なども多く家臣として登用しています。従って、義弘が在城していたころの帖佐麓には、多種多様な有能な家臣団が居住していたと考えられます。

その後、主要な家臣は義弘に従い加治木に移りましたが、帖佐に残り義弘に殉死した山路後藤兵衛、始良市指定文化財『帖佐修験米良氏文書』を残した米良氏、『高樋宇都宮氏文書』を残した宇都宮氏は、宿敵日向伊東氏から義弘へ臣従し、子孫は近代まで帖佐麓に居住しています。

重 富 麓



新園淳一郎
重富と呼ばれるこの地域は、昔から薩摩国と大隅国の境界にあり、各豪族間で争いが繰り返され、そのためこの地域には山城跡や神社・武家集落などが残されています。

戦国時代、島津氏と祁答院・蒲生氏の争い(大隅合戦)が、現在の始良市全域を戦場にして繰り返されました。

天文23年(1554)の岩剣合戦で島津氏が祁答院氏に勝利すると島津義弘が岩剣城に在番しましたが、日常生活が極めて不便なため現在の重富小学校に館を構え、周囲に家臣団の屋敷を配置した

平松城下ができたと考えられます。これが麓の始まりです。

その後、義弘の長女御屋地様が、この地で晩年を過ごしました。御屋地様にとって、息子の久賀が帖佐に居り、心強かったのではないかと思います。

元文2年(1737)鹿児島藩5代継豊は、断絶していた越前島津家を弟の忠紀に再興させました。領地として帖佐郷の脇元村・平松村・船津村・春花村、吉田郷から割いた触田村を加え、越前にゆかりのある「重富郷」と名付けて与え、島津本宗家を支える一門家にしました。

平松城が越前島津家の領主館となり、周辺は碁盤の目のような路地と武家屋敷群が整備され、重富麓と呼ばれました。

現在でも土地の区画は当時の面影を残しています。

山 田 麓

坂元清美



藩の直轄領であった山田郷には「地頭仮屋」が置かれ、その周りには、外城士(江戸中期以降は郷士)と呼ば

ばれる武士たちが居住する麓集落があり、山田川以南には西田野町と呼ばれる生活日用品を売る商店がありました。

小さな麓集落ですが、現在でも馬場沿いには玉石垣と生垣及び石柱門が残り、馬場から小路に入ると武家門も見られ、麓らしい雰囲気が残っています。

古馬場、新馬場の名からは時代とともに麓が拡大していく様子が窺われます。

ホソン神サア 米山薬師

竹之下洲一

今年になって新型コロナウイルスの感染が広がり、「新しい生活様式」に取り組む日々が続いています。

ところで始良市内には、疫病退散に^{れいけん}靈験あらたかな神社があります。それは帖佐鍋倉の米山神社です。^{はいぶつきしやく}廃仏毀釈以前は^{よねやまやくし}米山薬師と呼ばれ、薬師如来を祭る^{ほうそうよ}仏堂でした。古くから“帖佐で名所は米山薬師、前は白帆の走り船”と里謡に唄われ、「ホソン神サア」(疱瘡除けの神様)として名高いところでした。

世の中に^{ほうそう てんねんとう}疱瘡(天然痘)が流行すると、神社の近くに湧き出る^き疱瘡によく効くと言われる水(疱瘡水)を求めて、各地から多くの人々が押しかけていました。大正13年(1924)2月24日付の『鹿児島朝日新聞』の記事に、「米山薬師に^{きがん}疱瘡退治を祈願する善男善女のお参りで、時ならぬ大賑わいを呈した始良郡帖佐村では、鹿児島方面・加治木方面から毎日平均2千名を下らぬ人出がある」とあります。すでに18世紀末に、ジェンナーが天然痘のワクチンである^{しゅとう}種痘を^{にぎ}発明していたにもかかわらず、日本国内での普及はそれほどではなかったのでしょう。

当時の人々が帖佐小学校裏の^{きゅうこうばい}急勾配の参道を難儀して登り、天然痘の退散を願って米山神社に参拝した気持ちは、コロナウイルスの感染がまだまだ広がり、ウイズコロナ時代を生きる私たちにもわかるような気がします。



米山神社近くの湧き水(ほそん水)

始良市文化財ガイドブック(三部)の完成

吉田茂子

北は美しい里山、南は錦江湾に囲まれ豊かな自然に恵まれた始良市は、平成22年3月、3町(加治木、蒲生、始良)が合併して誕生しました。

始良市は、もともと薩摩と大隅の境にあり、地政学的にも文化・経済の交流や覇権争いの多い地域でもありました。そのため、市内には現在、国・県・市指定文化財が189件、国登録有形文化財が13件あり、県内市町村で最大の数を誇っています。

この豊かな文化財とそれにまつわる歴史に触れていただくために市教育委員会から「始良市文化財ガイドブック」(加治木地区編、蒲生・木津志・北山・山田地区編、帖佐・重富地区編)が刊行されました。是非とも、このガイドブックを片手に、苔むした石垣、見慣れない墓石や滑稽な面の石像などを見て、郷土に生きた先人たちの生きた証とふるさとの歴史の深さを実感してみませんか。ガイドブックに関するお問い合わせは始良市歴史民俗資料館までお願いします。



編集後記

高度な科学技術が発達した今日でも伝染病(新型コロナウイルス)は、世界中に猛威を振るっています。一刻も早い安心・安全な治療薬やワクチンの開発を望みたいものです。

なお、「鹿児島国体」もようやく各県のご協力を得て令和5年に特別大会として実施が決まりました。関係機関の融和と協力に感謝します。